

意味不明な日本語訳：大学入試過去問の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 公仁, Normile, Robert, NORMILE, Robert メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4461

意味不明な日本語訳 —大学入試過去問の研究—

英語教育センター 安藤 公仁
英語教育センター Robert Normile

はじめに

今年度、国公立大学や早慶など、いわゆる難関大学の入試問題に取り組む機会があった。赤本と通称されている教学社の大学入試シリーズや KADOKAWA の「人気大学過去問シリーズ」を使用して、過去問の研究に集中的に取り組んだ。同時に、河合出版の英語長文問題「やっておきたい英語長文シリーズ」や「英文法・語法 良問 500 誤文訂正編」などの問題集も解いてみた。難関と言われる大学の入試問題とあって、センター試験などとは次元の違う難易度があった。とりわけ、早稲田大学の問題は、「世界一わかりやすい早稲田の英語合格講座」の著者の関正生氏に「問題自体は東大より難しい」(関,2010,p.2)と言わしめているだけあって、問題量の多さも相俟って、相当の準備をしない限り太刀打ちできない入試問題と言える。そこで、本稿では、まず、早稲田大学の入試問題に対する全般的な感想を述べ、次に表題に示したように、意味不明な日本語訳や明らかな誤訳など、実例を引用しながら、長文問題に採用されている英文の日本語訳の問題点について述べていきたい。尚、共著者として名を連ねている ELTC の Robert Normile 氏はネイティブ・スピーカーの informant として、英文解釈にあたっての貴重な意見を提供して頂いた。

I. 早稲田大学社会科学部の英語

「早稲田の中でも難しい問題」(関,2010,p.19)と関氏が述べている、社会科学部の 2015 年度の問題、全 5 問を見てみよう。

I-1. 問題 I 文法・語彙 (誤り指摘)

30 語前後の英文の a～d の 4 か所に下線部があり、誤りのある下線部を指摘する。誤りがなければ「e NO ERROR」を選ぶ問題。全 10 問あり、NO

ERROR の英文は 2 問、どの英文も英文解釈としても難易度の高い英文であり間違い探しはかなり難しい。初めて早稲田の正誤問題に取り組む生徒は絶望的な気持ちになるかもしれない、実際、合格者の最低点正答率である 6 ～ 7 割正解できる高校生は少ないであろう。このような正誤問題が受験生の英語力の判定に有効かどうかについては、テスト問題の *reliability* や *validity* の観点から批判的な意見がある。しかし、受験生は入試問題の批判をしていても合格できないので対策するしかない。他学科の入試問題も含めて、5 年分ほど誤り指摘の問題に取り組めば正解に至るコツがわかってくる。具体的には、現在分詞か過去分詞か、S と V の確認、関係句に着目など、着眼点を意識して読めば正解が見えてくる。

I-2. 問題Ⅱ～Ⅴ読解

主題と語数については、赤本のまとめによると、Ⅱエネルギー分野におけるバッテリーの重要性（約 460 語）、Ⅲ家庭改革という語が意味するもの（約 600 語）、Ⅳ人類の幸福は持続可能な発展にある（約 520 語）、Ⅴ認知症高齢者の窮状と地域支援組織の発足（約 890 語）となっている。問題形式は内容真偽、空所補充、同意表現などであるが、受験生にとっては 90 分の解答時間に対する問題量の多さが、速読と読解の両立など、大きな課題となる。2015 年度の問題は A5 判で 17 頁に亘っているが、直近の 2019 年度の問題は語数が 5 割増しとなり、23 頁に亘る問題となっている。長文を読み、設問を見て再度長文を見直すという方法では間違いなく時間が足りなくなる。解答法としては、75 分で A4 判 28 頁の問題に取り組む TOEIC の解答法と同様に、まず設問を読み、英文から正解の部分を探りあてる“reading for information”の手法となる。

率直な印象としては、これほど難易度の高い、しかも大量の問題への解答を高校生に要求する必要があるのだろうかという疑問が残る。因みに合格者の最低点正答率は、130 点満点中（英 50 国語 40 社会 40）、2014 ～ 2018 の過去 5 年間で最も高いのが 68.8%、最も低いのが 59.3% である。競争率が優に 10 倍を超える入試だということを考えれば、いかに難易度の高い入試問題であるかがわかる。もちろん、日本の政財界、言論界のリーダーを輩出している早稲田大学のプライドから言えば、この程度の難易度の英語情報量を素早く処理することを求めるのは当然のことなのかもしれない。

Ⅱ．英語長文日本語訳の問題点

長文問題の設問に対する解答法は実際の過去問に当たり、解答解説をよく読み、最も効率的な方法を見出して行かねばならないが、その際、本文の日本語訳は受験生にとって、正解へ至るための最も直接的で、有用な情報であることは間違いない。しかしながら、日本語訳として掲載されているものの中には、英語を日本語に置き換えただけの、何を言いたいのか全く意味の分からないものも少なくない。この点は、過去問解説本だけでなく、英語長文問題の参考書についても言えることである。このような日本語訳を示すことは受験生に意味を正確に理解するのではなく、とにかく日本語に置き換えたら良いという間違ったメッセージを送ることにもなりかねない。また、明らかに誤訳と思われる日本語訳を平然と掲載している例もある。以下、事例を三つあげてみたい。使用するのは、教学社の「赤本」と河合塾の「やっていきたい英語長文 700」である。

Ⅱ－(1) 過去問解説本の意味不明な日本語訳

2018 年度の大阪大学一理系前期の下線部訳を求める問題。

○日本語訳：文化とは、価値観が宿るところであり、諸文化の研究は価値観が社会によって、あるいは歴史上のある時期から次の時期に移ると、どのように変わるかを明らかにする。しかし、文化は抽象的に存在しているわけではない。それどころか、文化は美的交換だけではなく日常的な交換の通貨でもある絵画、オペラ、服飾、あるいは買い物リストの中に刻み込まれている。

この日本語訳では高校生は下線部の英文の意味を十分理解できないのではないだろうか。特に、「文化は美的交換だけではなく日常的な交換の通貨でもある絵画、オペラ、服飾、あるいは買い物リスト」という部分である。英文を見てみよう。

○英文：Culture is the location of values, and the study of cultures shows how values vary from one society to another, or from one historical moment to the next.

But culture does not exist in the abstract. On the contrary, it is inscribed in the paintings, operas, fashions, and shopping lists which are the

currency of both aesthetic and everyday exchange.

この英文で“currency”を「通貨」と訳してしまつては意味が不明になってしまう。文化交流とはそれぞれの文化が刻み込まれている人工物を通して、それぞれの文化の価値観の交流・やり取り（exchange）であり、そこに登場する物品が“currency”なのである。したがって、この部分の日本語訳は「芸術作品の交流だけでなく日常的な文化交流に登場する物品である、絵画、オペラ・・・」とするのが分かりやすいのではないだろうか。

II－(2) 英語長文問題の参考書における意味不明な日本語訳

意味の不明な日本語訳は過去問の解説本だけではなく、長文読解の受験参考書にもある。河合塾の「やっておきたい英語長文 700」から一例を見てみよう（pp.8-9）。

○英文：The rise of the word “international” itself in the eighteenth century indicated the growing importance of territorial states in organizing social relations.

○日本語訳：「国際的」という言葉そのものが 18 世紀に使われるようになったことは、社会間の関係を編成する上で領土国家の重要性が増大していたことを示していた。

問題にしたいのは“territorial states”を「領土国家」、「social relations」を「社会間の関係」と訳していることである。そもそも、「領土国家」なる言葉は存在するのだろうか。“territorial”には「地方守備の」とか「地方守備軍兵士」という意味があることから、この文脈の“territorial states”は領土問題に発展する可能性のある「国境を接している国々」を意味していると考えるべきである。また、“social relations”は「社会間の関係」ではなく「外交関係」あるいは「同盟国関係」と解釈することによって、続く“in organizing social relations”という表現とも意味上自然なつながりを持つことができるのである。

II－(3) 過去問解説本の誤訳例

受験生が長文問題の過去問に取り組む時、やはり本文の日本語訳を参考にする事が多いと思う。II-(1)(2) で扱った事例は直訳調で意味が不明な日本語訳であるが、中には「こんな日本語訳例をよく出すなあ」「日本語の意味が

分かっているのだろうか」と思わざるを得ない明らかな誤訳もある。

There is a slow march toward improving today's systems, by 5 or 10 percent a year. Meanwhile, many innovative companies, scientists, and engineers are exploring novel approaches. (中 略) If you are a battery company and your cost per unit of storage doesn't drop by a factor of two in the next five years, you are going to be ____ .

この引用部分は「エネルギー分野におけるバッテリーの重要性」について述べた約 460 語の英文の最終段落で、下線部の空所に入る最も適切なものとして“out of business”を選ばせる問題である。日本語訳が求められているわけではないが、ここで問題にしたいのは過去問解説本に掲載されている、筆者が下線を施した英文の次の日本語訳である。

○日本語訳：蓄電単位当たりの費用が次の 5 年のうちに 2 つの要素のうちの 1 つによって低下しなければ、あなたは倒産するであろう。

何という日本語訳でしょうか。設問の解答にはほとんど影響はないとは言え、早稲田に合格したくて必死の思いで受験勉強をしている高校生に対しても余りにも無責任な日本語訳例の提示である。「2 つの要素のうちの 1 つによって低下」とはどういう意味の日本語なのだろうか。“factor”には「約数、除数」という意味があり、“drop by a factor of 2”は「2 という約数で減少する」つまり「半減する」という意味になる。“drop”ではなく“increase”なら、「2 倍に増える」という意味になる。

おわりに

本稿で扱った事例は氷山の一角に過ぎないであろう。受験生が英文の意味を十分吟味することなく、英語を日本語に置き換えるだけの英文解釈に陥ることのないよう受験指導に当たりたいものである。また、扱った事例は受験生が全幅の信頼を寄せているであろう出版社の参考書からとったものである。執筆者には日本語訳例には十分な注意を払ってもらいたいところである。

[引用参考書]

関正生「世界一わかりやすい早稲田の英語 合格講座」

(KADOKAWA 2010)

杉山俊一 塚越友幸 山下博子「やっておきたい英語長文 700」

(河合出版 2005)

[引用過去問集]

「大阪大学理系 2020」(教学社 2019)

「早稲田大学社会科学部 2020」(教学社 2019)